

# I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

## Vol. 13

### Bill Evans【ビル・エヴァンス】

～今尚、絶大な人気を誇る永遠のジャズ・ピアニスト～

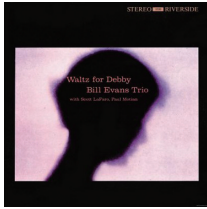


写真提供：ユニバーサルミュージック株式会社

#### Profile

1929年8月18日、米国ニュージャージー州ブレンフィールド生まれ。本名はWilliam John Evans。最初にフルートとヴァイオリンを学び、6歳の頃からピアノを始める。13歳の時、兄ハリーが組んでいたハイスクール・バンドで演奏。46年からニューオーリンズの「サウスイースタン・ルイジアナ・カレッジ」で4年間ジャズを学び、同地でマンデル・ロウ（g）やレッド・ミッチェル（b）等と共演。50年にハービー・フィールズ楽団に6カ月間在団した後、約3年間の軍隊生活を経て、54年にジェリー・ウォルド楽団に加入し、初録音を果たす。56年3月から12月にかけてのジョージ・ラッセルの『Jazz Workshop』に参加し、これが縁で当時新しいピアニストを探していたマイルス・デイビスのグループに1958年2月に加入。一年足らずで同グループを離れるが、翌59年にマイルスの作品『カインド・オブ・ブルー』録音の為に一時的に再加入。59年から自己のピアノ・トリオを結成。幾度かのベースとドラムの入れ替えがあった後、スコット・ラファロ（b）、ポール・モチアン（ds）とトリオを結成し、伝説の「リバーサイド四部作」を録音。1961年7月にスコット・ラファロが自動車事故で急死したことが、ビルの音楽活動に多大な影響を与え、一時音楽を断念することも考えたが、ベースにチャック・イスラエルやエディー・ゴメス等を迎えるなど、トリオによる活動を続けた。1973年に初来日。その後も晩年まで精力的に演奏活動を続け、数々のトリオ作品やソロ作品を発表した。1980年9月9日から出演していた「ファット・チューズデイ」で演奏中に倒れ、その数日後の1980年9月15日に息を引き取った。死因は肝硬変、気管支炎、出血性潰瘍とされる。享年51歳。

## 伝説のトリオの伝説のライブを収めたビルの代表作！



**Waltz For Debby**  
**Bill Evans Trio**  
 (ユニバーサル: UCCO-9201)  
 Bill Evans (p), Scott LaFaro (b), Paul Motian (ds)

1. My Foolish Heart 2. Waltz for Debby (take 2)
3. Detour Ahead (take 2) 4. My Romance (take 1)
5. Some Other Time 6. Milestones 7. Waltz for Debby (take 1)
8. Detour Ahead (take 1) 9. My Romance (take 2) 10. Porgy

スコット・ラファロ (b)、ポール・モチアン (ds) との伝説のトリオで録音した「リバーサイド四部作」の一枚で、1961年6月25日に行われた「ヴァレッジ・ヴァンガード」でのライブを収めたジャズ史に燦然と輝く超名盤！ 数あるビルの名作の中でも代表作のひとつと言いつつ切れる作品。このライブ当日から僅か11日後にスコット・ラファロが急死したことで、更にその伝説化に拍車がかけられたが、「マイ・フーリッシュ・ハート」～「ワルツ・フォー・デビー」など、「インタープレイ」と称される3人の絶妙なプレイや即興性はこの一枚を聴けば即納得。客席のざわめき、食器の音なども混じり、ライブならではの臨場感が堪らない。ビルが思い描いたピアノ・トリオがひとつの完成を見た名作！

## ビルの内面を捉えた感動のソロ・ピアノ名演集



**Easy To Love**  
**Bill Evans**  
 (ビクターエンタテインメント: VICJ-41484)  
 Bill Evans (p)

1. I've Got It Bad (And That Ain't Good) 2. Waltz For Debby
3. My Romance 4. Peace Piece 5. Lucky To Be Me
6. Some Other Time 7. Epilogue 8. Ducky Boy 9. Like Someone In Love 10. In Your Own Sweet Way 11. Easy To Love

50年代に活躍したロックンローラー、パティ・ホリーをより知的でクールにしたようなビルの表情が印象的なジャケットも好きだが、この作品は伝説のトリオのベーシストだったスコット・ラファロを1961年7月に不慮の自動車事故で失ったショックから立ち直れずにいたビルが、漸くスタジオでのソロ・アルバム録音にOKを出し、その際に演奏した4曲が収められているアルバム。しかし、その4曲を演奏しただけで精神的な問題から演奏不可能になってしまい、長らくお蔵入りとなっていた音源だった。その中でも、「ダニー・ボーイ」の演奏は一聴の価値あり！ 62年4月4日に録音されたこの4曲以外は、56年と58年に録音されたもので、ソロによる「ワルツ・フォー・デビー」も収録。

## ビルが初めてエレクトリック・ピアノを導入した画期的作品



**From Left to Right**  
**Bill Evans**  
 (ユニバーサル: UCCU-5253)  
 Bill Evans (p, rhodes), Sam Brown (g), Eddie Gomez (b), Marty Morrell (ds), Michael Leonard (arr, cond)

1. What Are You Doing The Rest Of Your Life? 2. I'm All Smiles
3. Why Did I Choose You? 4. Soiree 5. Dolphin-Before
6. Dolphin-After 7. Lullaby For Helene 8. Like Someone In Love
9. Children's Play Song 10. ~13.

録音は1969~70年。これまでのイメージを一変するような斬新なジャケットでも話題になった作品で、ビル・エヴァンスが初めてエレクトリック・ピアノを導入した多重録音アルバム。ジャズに限らず当時の音楽シーンの時代背景もあったのだろう…アコースティックとローズのエレクトリック・ピアノを見事に使い分けた画期的な作品に仕上がし、オープニングの「What Are You Doing The Rest Of Your Life? (これからの人生)」から、哀愁たっぷりのビルのエレピが胸を打つ。お気に入りの「Dolphin-Before」～「Dolphin-After」で、アコピからエレピへと流れていくメロディが美しく、切なく、サム・ブラウンのギターの音色も味わい深い感動のナンバー。ビルが新たな一面を見せた名作。

## ビル・エヴァンスの悲劇

最高のパートナーであった若き天才ベーシスト、スコット・ラファロの死は、ビルに生涯に渡ってショックを与え続けていたのかは、本人にしか分かり得ないことだが、その後も同じ系統のベーシストを好んで雇っていたように、亡きスコットのプレイを追い求め続けるかのような姿が痛々しくもあった…。そして、夫婦同然に暮らしていた恋人エレインに別れ話を持ちかけた後、エレインがニューヨークの地下鉄に飛び込んで自殺を図るという悲劇…。これによりドラッグに救いを求める度合いも増え、更に晩年、ビルが「ファット・テューズデイ」で演奏中に倒れ、その数日後に亡くなった1980年の前年には、実兄ハリーがビルと自殺で命を落とすという更なる悲劇に見舞われていた（「ワルツ・フォー・デビー」は、兄ハリーの娘デビーのために作曲したナンバーだ）。そんな人生の一幕を噛み締めながら、ビルの音楽を聴くと更に胸に染みて来る。

## マイルスが認めた才能

1958年にビルが、マイルス・デイビスのグループに参加したのは、ビルの師匠ジョージ・ラッセルの推薦によるものだが、マイルスもクラシックの影響を受けたビルのピアノに魅せられ、ビルに「モー ("Moe")」とあだ名を付けて可愛がったそうだ。

## ビル・エヴァンス初来日

ビルが初来日を果たしたのは1973年1月。エディ・ゴメス (b)、マーティ・モレル (ds) とのトリオでの来日で、全11回の公演を行った。尚、来日した際はボマードで髪をピンと撫で付けていた若き日のイメージとは異なり、ロング・ヘアにチョビ髭という風貌だった。勿論、その知的なイメージに変わりはなく、その姿は東京「郵便貯金ホール」での公演を収めたアルバム『ライヴ・イン・トーキョー』のジャケットで拝見できる。